第7話

キトラ・アル・ヴィース…

人ならざるほど美しい

銀髪の高位魔族…

お前…名は？

……

カイル…ですが……

そっちはネルとか言ったな

国王に伝えておけ

……

こいつを借りる

あとで返す…とな

俺が…伝言…？

……

っ…
うぉわっ…!!
一瞬で移動した…
魔族の異能力か…
ここは王宮内で私にあてがわれた部屋だ
カイルとか言ったな
お前はなぜ――

我らアル・ヴィースの紋章を持っている…？
ポウ…
熱っ!?
これは我らのもの
ズズズ…
答えろ…誰からもらった？
……
それは…私を産んだ女性から譲り受けました…
母君から？健在なのか？

俺は…
彼女が望まずに
できた子で
捨てられて
孤児育ちです…

ですので
彼女とは親子の
関係では
ありません…

ただ…
彼女に最後に
会った時に
それをもらいました

父親のもの
だった…と…

……

……
そうか…

……

ギュッ

無礼を承知で…

ひとつ…
お聞きしても
よろしい
でしょうか…

あの…

ギュッ

あなたは…
二十数年前の動乱の際は…
この都にいましたか…？

待て……
なんだその質問は…

お前…
まさかとは思うが…
この私を父親だと疑っているのか…？

どうなんですか…
どう見ても年齢が違うだろう！
私をいくつと思っているんだ
くわっ

魔族の方の年齢はよくわからないので…
純血の魔族は人間の二倍生きる

人間の五歳は魔族の十歳と同じ…
つまりお前が生まれたであろう頃は
私はまだいたいけな少年だった
わかったか
はぁ…
自分で「いたいけな」とか言うんだな…
でも…
そうか…
違うのか…
……
あの…アル・ヴィース様…
キトラだ…呼び捨てろ
えっ…

ええと…
き…キトラ…
それは
お返しします
もともと…
私のものでは
ありませんので
持ち主を
探そう
いいえ…
お気持ちだけで
……
ならば
受け取るが…
カイル
……
これも
何かの縁だ…
何かあれば
私を頼るがいい
力に
なってやる
もったいない
お心遣い…
ありがとう
ございます…
なんか…
思ったより
ずっといい人
だな…

では…
失礼いたします…

……

さっきは突然
どこに行ったかと
思ったら

魔族の長に
連れて行かれた
んだって？

え？

ネル伯爵が
国王に報告
しているのを
聞いたんだ

そういや…
伯爵（ハイシャク）を伝言役に
使ってしまった
んだった…

どんな話を？

王都にいる魔族の
縁者の暮らしに
興味があった
みたいで…

へぇー

今日の任務は終わりか？

うわ!!!

うわ…？

閣下…！

終わったなら帰るぞ…

乗れ

辺境伯家自家用車

いやいやいやいや

俺はお借りした馬で…！

いいから乗れ

いや…あのちょっと…！

ブルルッ…

……

辺境伯と同じ馬車で帰るのはまずいだろ

それに馬も――

んっ…
くちゅ…
っ……
は…
は…
無事でよかった…
連れ去られたと聞いて心臓が止まるかと思った…
……
ごめん…

なるほど…

ハインツとアル・ヴィースの長の件については理解した

お前の母親の所在に関して…

ハインツを探る必要があるな

…うん……

でも…今日キトラに会えてよかったのかもしれない

アルフには「会っても仕方がない」なんて言ったけど

正直…少し気になっていたんだ

俺には

孤児院の爺ちゃんやキースがいて…

アルフにも会えた

それで充分なはずなのに

どこかで自分にとって揺るぎない存在に会える事を期待していた

今度こそ父親の事は…忘れる

どうせ最低な奴だろうしな…

……

カイ――

アルフ？

……

いや…

見られている気がしたが…
ズズ…
気のせいか……
数日後…

カイルー

今日は王女様やユキに会わないの？

あぁ…ユアンの頼まれ事で王宮に来ただけだから

じゃあニニギ…すぐ戻るからいい子にしてるんだぞ

わかったわー

カイルも知らない人についてっちゃだめよー

ユウカイされちゃうから！

ははは…

お母様ー！

！

お行儀が悪いですよ殿下

陛下とダンテ夫人…二人ともだいぶ元気になったようだな…

魔族との交流もうまくいっているようだし

喜ばしいことだ…

さて…
無事遣いも終わったし
早いとこ帰るか…
ズ…
ズズ…
ズズ…
誰だ
ああ…
怖い顔をなさらないで
危害を加えるつもりはないんです
カイル殿…

あなたは…
キトラ様にお仕えするカムイと申します
キトラの側近…？
王都の同胞がどんな暮らしをしているのか興味がありましてね…
ぜひ…これから我らと共に夕食でもどうかな
はぁ…
ぜっ？
しかし…私は辺境伯の部下です
主の許可なしにお誘いに応じるわけには…
そう言わずに
私は…
あなたの母君を探すことができますよ？
……は…？
すみません…純粋にあなたへの興味から盗み聞……
いえ…いろいろ調べてしまいました…
しかし——

一介の名もない孤児が
キトラ様に父親かと尋ねるなんて――
もの知らずは罪ですよカイル殿…
キトラ様の前でアル・ヴィースを騙るなど…
あの場で殺されても文句は言えない非礼ですよ…
それは……
……いえ…
おっしゃる通り私が無礼でした…
至らなさを教えていただきありがとうございます
――……
……いい
ボッ…

良い!!
たまらないっ…
新っ鮮だぁぁぁー!!!
その反応最高〜〜〜♡
もう一回言ってください
その可愛いお口でぇ〜〜〜
はーっ
はーっ
ありがとうをもう一度
はいっ
ボッ!
あひあひょおごふぁいふぁひゅ……
はぁ…ん
それっ……
あーキトラ様もそんな感じで私にお言葉をかけてくだされば
……
失敬…お話を戻しましょう

私には影に紛れたり
遠くを見たり
気配を辿ったりする力があります
あなたの血を少しいただくだけで母君の行方を辿ることができる…
どうです？試してみませんか？
しかし…あなたになんの得が？

主があなたを気に入っているようなのでね
親切にして心証をよくしておきたいんですよ
あとはあなたの上司の歓心を買いたいんです
辺境伯は…あなたとずいぶん懇意でいらっしゃるようですし…？

……
知りすぎている…
信用していいのか？
でも…
ギリ…

……お願いします…

彼女を見つけ出すことができるというなら乗るしかない…

ええ…

では――

ガリッ

クラ

んっ……

っ……

はっ……

そうですか…

やはり
あなたは…

あの…

申し訳
ありません！

あまりに
美味しくて
つい…

しかし…
あなたがキトラ様の
そうだとわかった
以上は

私はあなたの
味方です

安心して
ください

…？
なんのこと
です…？

今にわかり
ますよ

さて…

それでは
約束を果たすと
いたしましょう

一体いつまでここにいればいいというの！
早く出して！
ポウ…
コンスタンツェ……
ロシュインを返して！
私のたった一人の息子を……！
……
カムイ殿…

彼女には息子が…

私と半分血の繋がった弟がいるんですが

そちらの居場所も分かりますか…？

えーっと

あぁ…

お二人ともこの辺りですねぇ

同じ屋敷にいるみたいですよ

！

この屋敷は…

……

探しに行くなら私も行きましょうか!?

役に立ちますよっ！私っ

いえ

ご親切はどうかここまでで……

失礼します

ふーん…
……そう言われてもなぁ…
私はカイル殿に恩を売って持ち帰りたいし…
面白そうだからついて行っちゃお！
ズズ
ズ…。

第8話

ふぁあ…

ったく…ガキのお守りなんて暇で仕方ねぇ…
な!!
ドン
ギィィ…
やぁ坊や…
ゼクル

今日は
いい子に
できてたかな？
うん？
！
ちょっと
遊ぼうぜ
なぁ…！
や…っ

!?
ギリリ…
がっ…
は…
よかった…
怪我はないみたいだな
!!

あっ…
紅い瞳!!
魔族が何しに来たんだ
僕は魔族なんか怖くないんだからな!!
俺は魔族じゃないよ
騎士として…君をここから救うために来たんだ
その紋章…
王家に仕える騎士なの？
でも…魔族は皆悪い奴だって母上が…
……
それになんだか…

母上に…似ている…？

あなたは一体…

……

詳しい説明はあとで

まずはここを出よう…

ここは王都の郊外

東部の貴族が好んで住む区画

そしてこの屋敷は…

ネル伯爵家の所有物だ…

ずっと気がかりだった…

三年前…親しい人間しか知らなかった俺とアルフの関係をコンスタンツェに囁いたのは誰だったのか

ハインツは昔からアルフを嫌っていたし

俺にも何かと絡んできていた

コンスタンツェと再会した夜会にもハインツはいたし…

夜会で彼女と知り合ったハインツが彼女が俺の産みの母親だと知り

俺への嫌がらせに彼女をそそのかして仕向けたとしてもおかしくはない

少々強引な推察だが…

なんにしてもハインツに彼女を監禁してまで隠匿したい事情があるのは確かだ…

とにかく彼女から話を聞かないとな

これから君の母君を助けに向かう

ここで隠れて待っていてくれ

それと…君の無事を伝えてあげたい

母君が君からの伝言だとわかる何かがあれば教えてくれないか？

うん…

『母上の焼いてくれたクッキーが食べたい』って

そう伝えてほしい…

僕の名前は[redacted]ロシュイン…

宝物っていう意味の古い言葉[redacted]なんだよ

ロシュイン…いい名前だ
甘いものが好きなんだな
俺もだよ…

ガチャッ
！
誰!?
な…
お前は…
あなたに危害を加えるつもりはない
だが…ここにいてもらっては困る事情がある
ついてきてもらおう
何を…
お静かに…夫人
ギイ

あなたの息子も無事だ
！
ロシュインは…
あなたの焼いたクッキーが食べたいと言っていた
ロシュイン…！
！
母上！
ご無事で…！

あぁ…

よかった…!!

神よ…
感謝します…!

……

わぁ…!

すごい…飛竜ってこんなに高く飛べるんだ！

……

どこへ向かっているの？

辺境伯の王都の別邸です

！

閣下はあなたに聞きたいことがあると仰せだ

あとで詳しく説明するし

あなたにも全てを説明してもらう

……

この道を真っすぐ行けばじき辺境伯の屋敷です

同行していただけますね…？

わかったわ…
でも…
その前に…
お礼を言ってもよろしいですか？
カイル卿…
私と息子を救っていただき感謝します…
……
この微笑みに愛情はない
ただ…
息子と自分を救った騎士への感謝の念があるだけだ…
いえ…
あなたと息子さんが無事で嬉しく思います
夫人…

ブルブル
ブパッ
あ…
ぐ……っ

母上!? 何を…
カイル!!
なんてこと……!
誰か来て カイルが 死んじゃう!!
あぁ…
またこれか……
ばかだな…
俺…は…
!

カイル……！
！
これは
どういうことだ…

長――!!

先ほど申し上げた通りです!

刺されちゃってですね!!

いや助けてもらった相手をいきなり刺すとか思わないでしょ!?

お前を八つ裂きにするのはあとだ

屋敷に運ぶぞ…今すぐ!

そこのドラゴン

カムイ…

辺境伯に伝えろ

この者の身柄は私が預かると

……

わ…っ

わかったわ

あなたユウカイハンなのね!?

ちょwwwキトラ様wwwなんだかとっても悪党っぽいですwwwww

違う！誰が悪党だ

もういい…とにかく今はこいつの止血が先だ

寒い…

喉が渇いた

お腹が空いた…

爺ちゃん…

キース…

アルフ……

触れられる
だけで幸せになる

あたたかい

アルフの手…

違う…

この手は…

あるふじゃ…

気が付いたか…

き…とら…？

ない…

ス…

あ…

ビクッ

や…だ…

や……

や…

やだ…アルフじゃ…ない……

ン…

なるほど…

カムイから聞いてはいたが…

あのいけすかない辺境伯とお前は本当に恋人同士というわけか

ビクッ

ちがっ

あ…っ

ちが…う恋人じゃ…な……

おれじゃ……

つりあわ…ない…

おれは…
きたない……

だめ…だ…

誰からも…
望まれずに
生まれた…から…

そんなことは
ない……

ちゅ

や…

安心しろ…

意外にもお前を
可愛く思うが
性的な
意味はない…

治療だ…

ちりょ…う…？

魔族同士で生気を分け合うなら手っ取り早いのは性交だが…

さすがに私にも倫理観というものがある

お前に手を出すのはまずいだろうな…

んっ……

ツ…

私の血だ…死にたくなければ飲め

喉が灼けそうなほど甘い…

クチュ…

は…

甘露のような――…

もう大丈夫だ

安心して眠れ…

弟――…

チチチチ

第9話

……

ここは……

俺は確か刺されて……

モゾ

ピチチ…

ばっ

うわぁぁぁぁ!!

ピクッ

ん……

目が覚めたか…？

まだ眠いのに起こすな……

もっ

ピクッ

スル…

申し訳ありませんが

その…

これはどういう状況ですか…!?

なっ…何を

俺はしました!?

クス…

した…
というより
お前は
されたほう
だな…

ぬる…

ッ……

んン…っ

ちゅ

くちゅ

!!

しばらくは
大人しく
療養しろ…

ここは
我々魔族に
用意された
屋敷だ

好きなだけ
いてもらって
構わないぞ…

ペろ…

カムイです！入っても？

！

カムイ殿

あぁ

そうか

カムイ殿がキトラに報せてくれたのか

ぱっ

これはこれはカイル様ー！

いやー

お元気そうで何より！

本当一時はどうなることかと——

ブル

!!

いった――!!

何するんですか我が君！

カイル・トゥーリ

この男のお節介のせいでお前は殺されかけたわけだが…

どうする？

殺すか？

殺すのが哀れなら腕でも落とすか…

え……

いや……

クスッ

カムイ殿は…私の手伝いをしてくれただけですので…

カイル様はお優しい

つまらん

でも…

まさか魔族の長が助けてくれるなんて……

何!?

聞いていないぞ！

だが…もう屋敷の中に…

無下にもできまい

とにかくすぐ長にお伝えしろ

なんだ…？

キトラ様

何事だ

それが…

人間が…

イルヴァ辺境伯が来ています

お通ししろ
今…
ここに

カイル様
寄せ寄せ

え――

ああの…
何か服を
いただく
事は…

却下

それと…
お前はしばらく
黙っていろ

――…!?

声が…

昨晩の事は…

案ずること
はない…

私から
あの男に説明
してやる――

う

ガバッ ギャッ

うわ――!!

お招きしたつもりはないがよく来た…
着替える間がないのでこのままで失礼

いや～～～間男と夫の遭遇って感じですね～
修羅場ですね！
ね!!
しっ！
……
ゆく
ゆく

危急の用事がありましたのでここへ…

昨晩…私の部下が出かけたきり戻らず
彼の乗っていたドラゴンだけがただならぬ様子で屋敷へ戻ってきました

事情を知るため王女殿下のお力を借りそのドラゴン…ニニギから話を聞いたところ

『部下は悪党に攫われた』と…

あ
やはり捨てゼリフが悪党っぽいのがダメだったんですかねぇ
ね？キトラ様…
黙っていなさい！
ドンッ
痛いじゃないですか！

では……
そこにいる
私の部下を
あなたが
攫ったのに
間違いはない
と…？
ズ
そうだとも
アルフレート・
ド・ディシス…
そこの
騎士崩れが
道に落ちていた
のでな
拾って
愛でていた…
この男が
貴殿の恋人
らしいな？
なかなか
よく躾けて
ある…
感度がよくて
楽しめた
感度って
なんの話だ
…ふっ
記憶がない

はは…
まったく……
笑い方が怖い――
ダメだ…
ブブブ…
瀕死の男に悪戯をするのが魔族の流儀か？
ずいぶん趣味がいい…
閣下がこういう顔をする時は絶対にろくなことがない

私には到底真似できない

もしや――相手が素面では満足させられる自信がないので？

ピク

ああ…失礼

私には分からない悩みなのでつい…ははっ

意外に奥ゆかしい面がおありだな…

キトラ殿

……ほぉ？

ドッ

……っ

これ以上の刺激はまずい

閣下…

それに…ひとつ言っておこう

カイル・トゥーリは私の恋人ではない

伴侶だ

こんな公の場で

そこを間違えないでもらおうか

勝手な事を

はあ――!?

初耳

突然何言ってんだこの人…!

はっ

思い込みが激しいのが辺境伯の気質か？

そもそも…

カイルは
お前なぞ
恋人でもないと
言っていたぞ！

!?

可哀想に

フッフッフ

記憶がない

フッフッフ

それでも
構わない

カイルが
無事に
生きてさえ
いれば…

……なんの真似だ
あなたがカイルを救ってくださったのでしょう？
ニニギは早とちりなドラゴンなので詳細に状況を問いただしたところ
カイルが女に刺され
突然現れた魔族に連れて行かれたことがわかった
そして…

瀕死の重傷であるはずの彼が今…
やけに血色がいいのは
あなたの魔力による介抱のおかげでしょう…
ラ…
我が同胞を助けたまで
貴殿に礼を言われる筋合いはない
これは私が預かる…貴殿は帰れ
恩人の言葉には従いたいが公人としてはそうはいかない
殿下(カイル・トゥーリ)の大切な騎士を救っていただいたキトラ様への感謝を認めてある親書です
……
フィオナ王女殿下から親書を預かっている
ス…
ハア…
なるほど…

これは私が失礼した

カムイ…辺境伯一行を客間に通せ

はい！喜んで～

……

どうも…

！

声が出る…

人間の服より似合うのではないか？

え…？

はぁ…ありがとうございます…？

それより…俺がここに座ってていいのか…？

キトラ殿…

我々ニルス王国と魔族は今…互いに歩み寄ろうと努力している

以前のように魔族の特使を我が辺境伯領に置くことも考えていただきたい

……

貴殿らは…
我が里に生息するドラゴンが目当てなのだろう？
ドラゴンを定期的に手に入れられれば
国防の面でニルスは他国より優位になるからな
下心はあるが…必ずというわけではありません
それに…我々も安定した食料や衣料…医術など
多くのものを提供できます
そして何より…
上辺だけでなく真の絆とするために…
私は北に住む同胞として
あなた方と新しい関係を築きたいと思っている
……

承知した
辺境伯…
あなたの言う通りにしよう
特使についても検討する…
ほ…
ただし…条件がある
それさえ叶えていただければ正式にニルスとの和平を約束する調印式に臨もう
条件…？

カイル・トゥーリを…

私の弟を

魔族の里に返してもらおうか

……

え……？

俺が

キトラの弟…？

カイルが持っていたペンダントには父の魔力が残っていた

第10話（前編）

そして何より…

そこにいるカムイの能力で

カイルの血からアル・ヴィースの血脈を認めた

すみません…

母君の捜索をお手伝いした本当の理由は

カイル様の血をいただきキトラ様との血縁を確認したかったからなのです…

生き別れの弟を引き取るのは兄の役目だ…

我が里に来い…
カイル
そんな…
国同士の和平がなったとて
半魔は人の世では生きづらい
何せ…
産みの親から疎まれるくらいだ
拠り所もなく…
人間たちの憎悪に晒され
さんざん不幸な目に遭ってきただろう？
……
不幸……
そうじゃなかったとは言い切れない

でも俺には…

寄り添ってくれた家族がいる

半魔族の俺を

受け入れてくれる人たちがいる

それに――

この国には

アルフが――…

カイルはこれから魔族の里で私の庇護のもとにあるべきだ

いいな？辺境伯…

……

カイルが魔族の里に行きたいというなら

止めはしない…

カイル・トゥーリは私の所有物ではない

たとえ国の大事でも彼の意思なしに私が決められることはない…

……

勝手だな…俺は……

アルフの手を振り払うのは

いつだって俺なのに

その手を差し伸べられないと

ひどく寂しいと思ってしまう…

……

長い旅くらいは構わない…

待つ

一年か

半年か

数年か…

飽きるまで魔族の里にいてもいい…

それでも
もし帰って
こなければ
迎えに行く
だけだ

カイルが
降参するまで…
何度も……

……

だが…
カイルは
きっと私のもとに
戻ってくる…

私は
しつこいん
でね…

閣下…

しつこい
自覚はあったん
ですね…

よかった…

……

ホッ

チッ
まったく
不愉快だ
！
――……

惚気など
聞きたくも
ない
馬鹿馬鹿
しい…
ガタッ
キトラ…
わかっている

和平を
約束する
調印式へも
つつがなく
臨むことを
約束しよう…
……
特使の件は
考えておく…
あの…
それと…

まだ実感がなくて…

あなたが…俺の…

……

お前は父に会いたかったようだが…

奴は死んだ

暴虐だった奴の圧政を終わらせるために

一族のものが謀反を起こし…

相打ちで死んだ

だが…

ブツブツ…

お前には

兄である私がいる…

これは私のものだ

お前にやる

これを見るたび…

お前の誕生を喜んだ血縁がここにいることを思い出せ

いいな…

…はい……

とりあえず…

お前の男の趣味が悪いのはわかった…

嫉妬深い男はやめておけ

嫌になったらいつでも里に来るんだな…

客人のお帰りだ――…

パラ…

帰ってから少し熱が出た以外は不調もないし

もう傷口は完全に塞がっている

刺されたのはつい昨日のことなのに…

でも――

刺された時の灼ける(やける)ような痛みは

傷が癒えてもはっきりと思い出せる…

辺境伯…

カイル様の母君の居場所は私の能力でいつでも突き止められます

有事の際はお申し付けください…

……

コンスタンツェ…

彼女の存在に一方的に何かを期待していた

でも彼女から与えられたのは痛みだけだった

いい加減…けじめをつけるべきだ

俺も

彼女も…

カチャ

！

アルフ…

まだ完全に回復してないだろう

横になっていろ

もう平気だ

それより報告が――

生きて会えないかと思った…

本当に……

……

特別な事情があったにせよ

今お前は王女殿下の騎士の身だ

もっと自覚を持って行動しろ…

ごめん……

……

ぐ…

はぁ…

勝手なやつだ…

お前が謝れば

私は結局お前を許さざるを得ない…

回復したら山ほど文句を言ってやる…

覚悟しておけ

うん……

ス…

ピチャ

――……

今日は…しないぞ…
え？
ばっ
！
本調子じゃないお前を抱きたくない
それに…私は怒っているんだ
抱いてなし崩しに許したりはしないからな
う…うん…
自分に言い聞かせている
第10話（後編）
……
アルフ……
ありがとう…
初めて会ったあの日から
俺は…アルフの存在に救われてる……

もう少しだけ時間はかかるけど…

伝えたいことがあるんだ

その時がきたら聞いてほしい…

――……

あぁ…

カイル…
私がどれだけお前の存在に救われてきたか…
お前は知らないのだろうな……
また大手柄をあげたと聞いたぞ

アルフレートよ…

これまで通り我が辺境伯家のために励め…

は…

精進いたします父上…

相変わらず期待されているようですね…

私に何かを期待しているわけではない

父上が気にかけているのは

辺境伯家の子息としての行いだ…

……

あの方がアルフレート様？

辺境伯家の末の弟君の…

なんて美しい方なのかしら…

お会いできて光栄ですわ！

辺境伯であるお父上の偉大さは

かねがね伺っております…

手柄を持っていくのはいつもアルフレートだ

仕方ないさ…

重大な任務を任されるのはあいつの班ばかりだからな

はっ

くだらない…

辺境伯の息子といっても所詮は庶子だぞ？

ハインツ…聞こえるぞ

幹部の連中ときたら

何を必死に取り入ろうとしているのやら…

全く不愉快な！

ただの贔屓で任せられる仕事ではないことくらいわかっているでしょうに…

とりあう必要はない

任務を果たすことができればなんの問題もない…

そう…

なんの問題も――…

あ…っ

アルフ…！

……じゃなかった…

アルフレート様…

わぁ……！
いいなぁ一人部屋…
騎士になればお前にも与えられるぞ
ぼふっ
こんなに上等なソファに座るのはじめてだ！
でもこんなにいい部屋じゃないだろ？
やっぱアルフはすごいなー
……

私自身が評価されている訳ではない

父上が団に多額の寄付を贈っているからな…

上の連中が勝手に配慮したまでだ

ふーん…

そういえばアルフの家ってすごい金持ちなんだっけ

まぁな…

飛竜騎士団の中で知らないのはお前くらいだ

へへ…

俺は他の団員と違ってただの孤児だし…

アルフがどれくらいすごい貴族なのかわかんねーけど

別にいいかな…

だって

アルフは
アルフじゃん

アルフが
優しくて

すげー
いい奴だって
知ってるから

それでいいや

アルフ…？
どうかした？
いいや…
カイル……
お前は本当に可愛いな…

もう…

どこにも行くな

私の傍にいろ…

ずっと……